

日本ハーディ協会ニュース
NEWS from THE THOMAS HARDY
SOCIETY OF JAPAN



第86号 (2019年9月1日号)

発行者 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 名古屋大学大学院人文学研究科内
日本ハーディ協会 jimu.thsjapan@gmail.com
編集者 宮崎隆義 miyazaki.takayoshi@tokushima-u.ac.jp



(宮崎隆義撮影：ドーチェスターの‘Hangman’s Cottage’。1985年夏。)

大学でハーディを教えるということ

坂田 薫子

大学で卒業論文や修士論文の執筆の指導を担当するようになって20年以上が経つが、これまで学部ゼミ生の中でハーディ作品を卒論の研究対象に選んだ学生は数名しかおらず、大学院に至っては、修士論文でハーディ研究に取り組んだゼミ生は残念ながら一人もいない。私が大学生のころから変わらず、未だに人気の高い作品はジェイン・オースティンの『高慢と偏見』で、学部ゼミ生のほぼ全員がオースティン作品をテーマに選んだ年もあった。また、最終巻の映画化から10年近い年月が経っても相変わらず人気が高い作品はJ・K・ローリングの『ハリー・ポッター』シリーズで、私の記憶が正しければ、同シリーズが刊行され始めてから、ゼミ生の中に『ハリー・ポッター』を取り上げる学生が一人もいない年というのはまだ一度も経験していない。私自身もオースティンやローリングの作品の愛読者の一人であるため、もちろん指導は大変有意義なものなのだが、学部時代から今まで(細々と)ハーディ研究を続けている一人人として

は、ハーディ作品を指導する機会がほぼない現状に時折寂しさを感じることもある。

毎年、学部でも大学院でも、一年をかけてじっくりとイギリスの長編小説を読み解く演習の授業を担当しているが、現在の勤務校では、学部の授業の登録者が二年連続で6名以下になると、授業の閉講を迫られてしまうため、学生の集まる「人気」の高い小説をテキストに選ぶ必要がある。オースティンやブロンテ姉妹の作品を取り上げれば、受講者数制限を行う必要が出るほど学生が集まることがある一方で、ハーディ作品を取り上げると、せいぜい5名程度しか学生が登録しないというのが実状である。そのため、授業が閉講になって学科に迷惑をかけたりすることのないように、必然的に、学部生とともにハーディ作品をじっくりと味わう機会は失われている。多くの学部生が、英米の小説演習の授業で学んだ作品（やその作者）をそのまま卒論の対象とする傾向があるため、結果として、小説演習でテキストに選ぶと学生が集まる作品が、そのまま彼女たちの卒論の対象となり、ハーディ作品が卒論のテーマに選ばれることはまれになるという悪循環に陥っている。

また、英文学史を知るうえで、ハーディについて学ぶことは必須であろうと（少なくとも私は）考えているため、現在担当している「イギリス文学講義」という授業では、毎年『カスターブリッジの町長』、『テス』、『ジュード』を取り上げ、ハーディに関する講義を行う回を設けている。他の作家の作品に混じって、これらの作品もレポートのテーマの選択肢として挙げているのだが、ほとんどの学生がハーディ作品をレポートの対象にすることを回避する。リアクション・ペーパーや、休み時間中の学生とおしゃべりの中で、受講者がハーディ作品を「嫌う」理由としてことさら強調して述べるのは、講義で取り上げられていたので、本を借りて読み始めてみたものの、途中で「気分が悪く」なったり、「うんざり」したりして、最後まで読み進められなかった、とか、最後まで読んだものの、共感できる登場人物は一人もおらず、運命に翻弄され、何も行動できない主人公に「イライラ」させられ、ハーディ作品を読むのは実に「苦痛」だった、といった残念な意見ばかりである。ハーディ小説に厭世観、宿命論が色濃く表れていることは否定できない事実である以上、学生たちがこうした感想を持つことはある程度致し方ないことなのかもしれないが、平成生まれの学生たちに興味を持ってもらうために、昭和生まれの私に一体どんな工夫ができるのか、日々頭を悩ませている。

と、以上、現状の否定的な側面を嘆いてきたが、学部、大学院でハーディ作品を教えることで得た効果にも触れておきたい。多くの学生たちが読むのは「苦痛」だと公言するハーディ作品を「敢えて」レポートのテーマに選んだ学生の読解には感心させられるものが多い。上述の「イギリス文学講義」には他学科、他学部からも多くの学生が登録してくれるのだが、数年前に、西洋史を専攻している史学科の学生が、広くユダヤ人の歴史を論じながら、ジュードを19世紀イギリスにおけるユダヤ人の表象として読み解く可能性を探り、『ジュード』の悲劇の意味を分析するレポートを提出してくれた。その示唆に富む考察には大変感銘を受け、私の方がいろいろと学ばせてもらった。大学院において、他のイギリス作家やアメリカ文学を研究する大学院生や、文化研究を行う大学院生とともにハーディ小説を読む機会があると、彼女たちの示唆に富む考察にも多くを学ばせてもらっている。『はるか群衆を離れて』を読んだ年には、プリティッシュ・フォーク・リバイバルを研究している大学院生が、作品に登場するバラッドの意味を詳細に分析してくれて、大変勉強になった。また、今年はエミリー・ブロンテの研究を続けている博士課程後期のゼミ生と二人で『恋魂』を読んでいるのだが、彼女にブロンテ研究の視点から『恋魂』と『嵐が丘』の詳細な比較を行ってもらうことで、私の方が毎週『恋魂』の新たな魅力を教えてもらっている。ハーディについて教えることで、教える側の私だけが有意義な時間を過ごすのでは本末転倒なので、一人でも多くの学部学生たちにハーディの魅力を知ってもらい、さらに、できることなら、定年までに一度、ハーディについて修士論文を書きたいという大学院ゼミ生を指導する

機会に恵まれたいと心から願い、これからも日々、指導法を模索していかねばならないと覚悟を新たにしている。

「ハーディと私、その後」

工藤 紅

前回「ハーディと私」を書かせていただいたのは、イギリス留学から戻り、いくつかの大学で非常勤講師を始めて2年ほど経った、2010年でした。あれから9年。専任教員として経営学部の学生に英語を教える一方で、幸運なことに、非常勤講師として3つの大学で文学を教える機会をいただいております。どちらかというと教員側も学生側も忙しく作業を行わなくてはならない「英語」の授業を行い、学生の英語学習に対するモチベーションをどう維持させたらよいか、彼らの英語力をどう向上させたらよいかを試行錯誤する毎日の中で、文学の授業は私にとって、文学にじっくり向き合うことのできる貴重な時間であり、オアシスであると感じながら日々を送っています。

私の担当する文学の授業では、なるべく毎年ハーディの作品は扱うようにしており、私の好みから、長編小説では*The Mayor of Casterbridge*、短編小説では“An Imaginative Woman”をよく取り上げています。長編小説は抜粋部分を配り、演習の授業では学生に発表してもらい、講義では私が内容と英語を解説するという形式で、どちらの授業でも、感想を書いてもらうことにしています。ハーディを読んだ今の学生の感想を先生方とシェアする機会もなかなかありませんので、今回は、*The Mayor of Casterbridge*の第1章と第19章をよんだ学生の感想をいくつか紹介しようと思います。なお、紹介するコメントは本作品を1年間かけて読む、受講生50~60人の講義からのものです。

まず、第1章です。もちろんこの作品で最も有名で重要なエピソードである「妻売り」の場面です。当然のことですが、ほとんどが以下のような、酔って妻を売ってしまうHenchardに否定的な意見でした。「酒に酔った勢いなのか、積もるものがあつたのかは、よく分からないけれど、最低な奴だと思った。」「酔った勢いで言い出したことから、まさか本当に売ってしまうとは・・・。」「妻を売り始めた時の夫の態度に少しひいた。」「妻を売る行為は男の立場が上であることが明らかに示す行為であり、とても衝撃的でした。」「妻を売るという行為は酷く、許せないと感じた。」「同じ女性として心が苦しい。船乗りが白馬の王子に見えて、とてもかっこよかった。」一方で、「妻を売るという風習に関しては、合理的だし、それほど悪いこととは思わなかった。」「妻売りが実際に行われていたことだと知り驚いたが、その先が気になるほどの驚きはなかった。」という意見もあり、私にとって新鮮な驚きでした。

次に第19章です。Henchardの元に戻ってきたElizabeth-Janeが、実は彼の娘ではなかったことが、妻Susanの死後、彼女の手紙により明かされる場面です。この場面を授業で扱う時は、私自身、学生の反応が非常に楽しみで、ある種の快感になっている気さえしています。思いもよらぬ展開に、今年も教室がざわめきました。(学生が予習をしていない証拠でもあるので、複雑な心境ではありますが。)「Susanは何も考えていない人任せの女性だと思っていたが、実はとても計画性があって、したたかな女性だと思った。恐ろしい人だ。」「Susanとしては、『Henchard、1人で思い悩め!』みたいな感じでしょうか・・・。」「Susanはかわいそうな未亡人というイメー

ジだったのに、まさかこんな爆弾を仕込んでいるとは・・・。」などという感想が見られました。この章では、やはりSusanに対する学生の印象が大きく変化したようです。

文学の授業をする上で私が目標としているのは、できるだけ多くの学生に文学を好きになってもらうことです。好きというのが難しければ、興味を持ち、面白いと思ってもらうことです。第19章の感想の中には、「自分だったら耐えられない気がする・・・。」「手紙、衝撃的でした！もう一回読み返したいです。」「Hardyの他の作品もじっくり読んでみたくなるきっかけにもなった。」という嬉しいものもありました。興味を持ってくれる学生がいるということです。文学部の学生だからといって、全員が文学に興味を持っているとは限りません。私自身がそうでしたので、よく分かります。私が文学を面白いと感じ、興味を持ったのは、大学2年生で受講した文学入門の授業で、様々な文学作品に触れたことがきっかけでした。先ほどのような感想が出てくるということは、ハーディの作品には、そのようなきっかけになる力があるということです。

環境は様々に変わっても、私のハーディを好きな気持ちは変わっていません。そればかりか、年齢を重ねるごとに、ハーディの描く世界がより深く理解できるようになってきたように思います。同時に、ハーディを理解したい、理解できるようになった、という意識が研究に結びつくには、まだまだ時間がかかることも実感しています。自分の納得のいくようなハーディ研究ができるようになるまでには、長い旅が続きそうです。

「ハーディと私 その後」

唐 戸 信 嘉

博士後期課程に入学したとき研究対象としてトマス・ハーディを選んだ。理由は単純で、私の指導教授が現協会会長の新妻昭彦先生だったからである。それまでハーディ作品は『テス』と短編をいくつか読んだことがあるばかりだったが、先へ先へと読ませる物語の力は確かだと感じていたので、このような作家の作品ならくり返し読んでも退屈することはないだろうと思った。さしたる思い入れもなく、安易な気持ちでハーディを選んだことは認めねばならないが、予想に違わずハーディ作品は夢中になって読めるものばかりだった。おかげで博士論文では詩作品を含めて彼の作品を包括的に扱うことができた。

ただ、博士論文の執筆時に先生にくり返し言われたことは「どうも文学研究というより歴史研究に傾きすぎる」というもので、文学研究なのだから、文学テキストの分析、解釈を十分に展開せねばならないし、歴史研究の一環として文学研究を位置づけるにしても、文学テキストは通常の史料にはない精神史を内に蔵しているのだから、やはりテキストの詳細な分析が肝心である、と先生はいった。先生の懸念はもっともで、私の博士論文はしばしばハーディ文学そのものよりもヴィクトリア朝文化——とりわけ19世紀後半の人文科学の発達とその文化史的影響——に焦点化しており、寄り道が多く、深度のある力強い分析を欠いていた。この傾向は依然として私につきまとい、なかなか矯正できない。

博士論文を書き上げ、現在の大学に奉職して数年が経つ。ここ数年はハーディ研究を中断している、というか、その周辺に広がるヴィクトリア朝文化にふたたび気を取られている。あまり文学から離れるべきではない、と常々自分に言い聞かせているのだが、これがなかなか難しい。とりわけ、自分が教える側に回ると「そもそも文学を研究することにどんな意義があるのか？」と

この疑問が私の心の中で急浮上しはじめ、気がつけば「英文学研究」(English Studies)の起源を調べることに多くの時間を取られている。本来であれば学生のうちに自分なりの答えを見つけしておくべきだったのが、それを怠り、文学と真正面から向き合ってきたそのツケが、教員になった今になって回って来たのだ、と思う。

もっとも、物語を楽しむことについては人後に落ちないという自負はある。子供の頃からたくさん小説を読んできたし、夢中になった作品も少なくない。しかし、物語を楽しむことと、それを研究したり教育したりすることのあいだには断絶がある気がしてならない。ポストモダンの時代の生まれのせい、本の解釈は人それぞれで、その価値も相対的なものであるという考えが無意識のうちに染みついているし、トルストイやシェイクスピアや漱石の作品が、現代のベストセラーの推理小説や恋愛小説より「奥深く」、そう感じないとしたら読み手が誤っているのだ、とためらわずに言うことができない。要は、文学の享受はきわめて私的な行為であり、ある程度の客観性が求められるアカデミズムという場で教える素材として、ふさわしくないのではないかという迷いがある。研究するときも、教壇に立って講義するときも、どうしても焦点が形而上学的な文学テキストの中心から逸れ、気がつけば文化史的背景へとずれてゆく。これは、文化史的背景とはつまり歴史であるから、より客観的で、学問として論じるにふさわしい気がするからだと思う。

ちなみに、英文学研究の発生の由来を調べていると、それがナショナリズムの成長と密接な関係にあることがわかる。英文学研究はナショナリズムを補強する装置として誕生したわけで、イギリスの大学で初めて制度化された際、「なぜ誰でも読める言語で書かれたものを大学でわざわざ教えるのか」とか「個人で楽しめばそれでいいではないか」という意見が多方面から噴出したことが記録されている。英文学研究というものが生まれたときからすでに、似たような疑念を抱く人々はいたのである。自分の懐疑がまったくの的外れなものではなかったことは私を安堵させると同時に、学問としての文学研究の不安定さに長い歴史があることがわかる。

このように書いてくると、私が文学の価値を疑っていると思われるかもしれないが、それは誤解である。私はただアカデミズムと文学の折り合いの悪さを感じているだけである。前号の「ハーディと私 その後」で、山内先生が事務局メンバーによる神楽坂食事会に触れていたが、私も事務局補佐の一人として毎年その食事会に参加させていただいた。そして山内先生が報告されていた通り、ハーディ作品の主人公たちの誰が一番魅力的か、誰そのこういう行動をどう思うか、などという話題で大いに盛り上がった。このような話題でああでもないこうでもないで盛り上げられるところに文学の魅力の核心があると思うのだが、こうした井戸端会議的議論を教室に持ち込むのはなかなか難しい。この折り合いをどうつけるか、答えを見いだすのもうしばらくかかりそうである。

「ハーディと私」

杉本宏昭

ハーディとの出会いは、学部2年生の時、藤井繁先生の近代小説演習という授業だった。その授業では*The Woodlanders*を読んだ。ハーディに特に興味があったわけではない。単位ためだったのかもしれない。火曜日の3限が空いていたからかもしれない。とにかくこの授業からハー

ディと私が始まったことは確かである。大学院博士前期課程でハーディ研究をはじめ、後期課程では海外派遣奨学生として2002年から2003年までイギリス・ケント大学へ留学した。指導教授はMichael Irwin先生だった。

留学前から決めていたこと。小説の舞台となった場所を巡ること。これも藤井先生の影響である。先生に参考文献等をご相談したところ、地図を貸していただいた。便利な地図で、実際の地名の上に小説で使用された地名が記されている。またツーリストセンターで、パンフレットをはじめ様々資料が購入できることを教えていただいた。

DorchesterのB&Bに着いたのが2002年6月10日だった。次の日さっそく自転車を買い、「放浪」を始めた。当時の日記を再読してみると、この期間の滞在最後の日の7月18日まで毎日どこかへ出かけていた。実際自転車で巡ってみると、ドーセットは厄介な所である。Weymouthに行くならば、あの高い丘を越えていかなければならない（歩きや自転車で越えられた方にはわかるだろう。あれは丘ではなく「山」である）。バスを使えば確かに楽なのだが、「バスはいつでも使える。今しかできないことを」と自分を励ますように日記に記されていた。北方面に行くときは要注意である。登り道は緩やかで長く下り道は急で短い。Sturminster Newtonを往復した日の日記にはあの道この道の登りのキツさが愚痴交じりで大量に書かれている。しかしこの苦労のおかげか、17年たった今でも道を、風景を、曲がり角を覚えている。

このような苦労と引き換えだが、自転車での放浪は気楽なものでまた便利なものである。どこでも止まれ、電車にも乗せられる。Public Footpathで小さな小川に突き当たった時、自転車を対岸へ放り投げて渡ったこともある。Rainbarrowを探しに行った時は森の中を押し分けて進み、Salisburyの街中でも駐車場は関係ない。自転車で走ることは、おそらく見過ごしてしまうであろう物が目に留まること。またドーセットを走るということは、緑の中を走ること。植物の圧倒的な匂いは今でもよみがえる。

2003年2月半ばから3月初めまで、帰国前最後の放浪。この時の体験で忘れがたいことは2つ。一つ目が大嵐の日にPortlandに行ったこと。理由は単純で、Jocelyn Pierstonが雨の日にビーチを歩いたと書かれていたので、それを試したかったから。見渡す限り誰もおらず、雲は低く、横殴りの雨と風。全身ずぶ濡れ。「こんなことは誰もしないだろう。しかし今ここでしかできないこと」と日記にある（さすがにこの日はバスを使った。帰りのバスでは不快感120%だったが）。もう一つがSt. Juliotを訪ねた時（遠すぎるので電車で）。Michael Irwin先生が「あそこは違う。行けばわかる。」とおっしゃっておられたが、確かに違った。何がと言われると答えは難しい。しかしあの景色、あの日光、あの色、あの匂い、風の音、今でもあの丘に立った時の感覚がよみがえる。The Old RectoryでJames Gibson先生と奥様に偶然お会いした。Hardy's Roomに宿泊したが（当然）寝てしまったので今一つ覚えていない。

2002年6月10日から2003年3月26日の滞在で、ハーディ関連で写真を何枚とったかは正確にはわからないが、おそらく2万枚から3万枚の間であろう。時々見返すが、どうしてこの写真を撮ったのだろうと首をかしげるものもある。しかしこれも「今しかできないこと」の一つであったと思う。2018年夏のこと、Dorset County Museumで、The Thomas Hardy SocietyのMrs. Dee Tolfreeと偶然お会いする機会を得た。様々お話していて、ドーセットを自転車で巡ったことをお話すると、そのような人は聞いたことがない、あなたしか持ちえない貴重な経験なので皆さんに知ってもらったほうが良いと言われ、今更ながらこのような経験でも少し自信が付いた。今回、協会ニュースに「ハーディと私」ということで投稿させていただけることとなり、Mrs. Tolfreeのお言葉に従ってみようと思った。

《シンポジウム予告》

ハーディの短編小説の世界～その魅力と語りの技法～

はじめに

宮崎隆義

ハーディの小説作品については、長編小説について語れば足りるとして、短編小説が取り上げられることは少なかった。短編小説も長編小説のように書いているとの捉え方が影響しているであろうが、短編小説の世界をのぞいてみると、大変魅力に満ちたものであることが感じられる。ドタバタ喜劇のようなものから珠玉のものまで多種多様の作品があり、それらを詳細に読んでみると、ハーディという人物のもうひとつの、いやそれ以上の側面と魅力もうかがえる。作品中の手紙や日記などから浮かんでくる語りの技法に目を向けてみると、ハーディはかなり挑戦的に意欲的に新しいものに取り組んでいることがうかがえるし、それを意識して眺めてみれば、谷崎潤一郎がああ完璧なまでの作品『春琴抄』を生み出したその秘密も見えてくるようである。また、記憶や時間というものに目を向ければ、ハーディが作品の舞台としているウェセックスの過去の記憶と現在の時間とが交錯し合い、それがまた作品を読む読者個々の内面に入り込んで、過去の記憶と現在とをいったん相対化させながらやがて過去の記憶を現在という時間に内在化させてゆくのである。

ハーディの作品は、長編小説も短編小説も詩もすべてが蜘蛛の巣のように繋がりが合っている感があり、短編に目を向けることで、透明な蜘蛛の巣が揺らめき、その小さな揺れが波のように四方に伝わっていくように、長編小説や詩作品にも新たな躍動が生まれることを期待したい。

ハーディの短編小説の語り

宮崎隆義

ハーディの短編小説についての魅力を語るべく、その多様性と語りの技法等について、少し網羅的、体系的に整理しておきたい。その上で、すべてを取り上げることはできないが、'Barbara of the House of Grebe'を含む*A Group of Noble Dames*、手紙、日記に関して、'On the Western Circuit'、'Alicia's Diary'を含む*Life's Little Ironies*、*A Changed Man and Other Stories*、また語りの技法や視点の問題に関わっては、'What the Shepherd Saw'を取り上げ、さらに理性と迷信の狭間に揺れる人間を描きつつも、現代的なテーマを秘めた'The Withered Arm'を含む*Wessex Tales*を取り上げながら、ふたりのパネリストに繋げ、最後に饗宴としてまとめることができると考えている。

ハーディの短編小説における手紙

永松京子

ハーディの作品の中でしばしば手紙が使われることは、すでに指摘されてきた。これらの手紙についてはある程度の研究がなされてきたが、その多くは長編小説における手紙に焦点を当てたものであったと言ってよいだろう。短編小説における手紙に関しては、'On the Western Circuit'のようなごく一部の作品を除いては、あまり注目されてこなかったと思われる。

しかし、ハーディの短編小説全体を改めて読んでみると、手紙が使われている作品がかなり多いことに気づかされる。手紙に書かれた文章が引用される場合とされない場合があるにせよ、登場人物たちが手紙を書く、送る、受け取る、読むという場面は頻繁に出てくるのであり、ハーデ

イは短編小説においても手紙に重要な役目を与えているのではないかと考えられる。

今回のシンポジウムでは、いくつかの短編小説をとりあげ、手紙は書き手が書きたいことを正確に表すのか、それとも書きたい以上のことを表すのか、受け取り手は手紙を正確に読むのか、それとも誤読するのか、書き手と受け取り手の性別や階級は手紙にどのような影響を与えるのか、手紙は書き手と受け取り手を近づけるのか、それとも遠ざけるのかなどを考察したい。

ハーディ小説における「腕」と‘The Withered Arm’

服部美樹

今回の発表では、短編集 *Wessex Tales* (1888) におさめられている ‘The Withered Arm’ を取り上げ、「腕」というモチーフの使われ方に注目して作品の意味を考えてみたい。この作品は『呪われた腕』という邦題で翻訳されたこともあるように、呪いで腕がしなびていくという超常現象を扱っている。このような迷信や呪いという要素に加え、Egdon Heathという場所が登場することから、この短編には長編小説の *The Return of the Native* (特にその登場人物である Susan Nunsuch) を強く連想させる部分がある。しかしここで少し観点をずらすと、「腕」という要素においてもこの短編と *The Return of the Native* には興味深い対照が見られるのである。そこで本発表では、「腕」という要素に注目してまず ‘The Withered Arm’ と *The Return of the Native* を対照させ、さらに、ハーディの他の長編作品における「腕」の描写も検討し、ハーディが「腕」というテーマに抱いているイメージやこだわりがどのように読み取れるのかを確認したい。ハーディは「腕」に関して決して無頓着な作家ではない、と理解したうえで再び ‘The Withered Arm’ を読む時、より深い面白みが見いだせることを期待している。

《特別講演予告》

英語の音を読む——方法と実践

豊田昌倫

英語を読む場合、われわれはテキストの意味を理解しようとするのがふつうであろう。語彙や文法構造に注目して、意味を読み取ろうとする。たとえば、地下鉄の車両のドアに警告文——Obstructing the doors can be dangerous——を目にする乗客は、「ドア開閉の妨害は危険」の意味だと理解して、視線はすぐに広告や車内の光景に移ってゆく。ただ、しばらくこの文に目を止めると、意外な事実に気づくのではないか。すなわち、文字の背後に潜む「音」に何らかの特徴があるようだ。実際、日常の書き言葉においても、音声は常に微弱な信号を発しているにもかかわらず、読み手の意識に上ることはほとんどない。

本発表の目的は、一般の「コミュニケーション・モード」においては通常、等閑視される言語の側面、すなわち、書き言葉に潜む音声の顕在化にある。しばらくは、「コミュニケーション・モード」から「音声モード」に切り替えて、文学作品における音の意識を掬い上げてみよう。「音声モード」に入った読み手の注意を引くのは、どのような「音」なのだろうか。このモードに入ると、はたしてテキストに新しい光が投げかけられるのだろうか。分析の観点は、主として子音と母音の特性とその効果、頭韻と共韻、およびリズム。具体的には、Henry Fielding, Samuel Taylor Coleridge, Robert Browning, Emily Brontë, Thomas Hardy, Virginia Woolfなどの「音」を読んでみたい。

《編集後記》

5月に平成から令和へと、大きな節目を迎えました。独自の暦を持つことにはいろいろな考え方があろうと思いますが、時間の流れを肌で感ずるのは、聖歌隊の音楽に新しい楽器が加わったり、地層に露わになった三葉虫の化石を目にしたり、教会の鐘楼の鐘を目の前にするようなものかもしれません。それぞれどの作品であるかは容易に見当がつくとは思いますが、不可逆的な時間の流れに身を任せつつ、現在の時間の中にふと夜光虫のようにほのかな光を放ちながら浮かんでくる遠い過去の記憶にいつとき因われることを思うとき、ハーディの創作の思いをふと考えたりもします。齢のせいもあるのでしょうか。新しい入試のあり方に、私たちの職場である大学はいまだに右往左往しているような感がありますが、「抑えがたい新しきもの」(the irrepressible New)に抗いたいとは思いながらも押し流されている今の日本の教育の姿に、一抹の不安を感じる今日この頃です。

学期末等、お忙しい時期を前に、今号に玉稿をお寄せいただきました先生方には心より感謝申し上げます。最後になりましたが、編集を担当するにあたりサポートしていただきました皆様、中央大学生協印刷部の藤様にあらためて心より御礼申し上げます。

なお、次号は来年4月発行予定で、原稿の締め切りは来年2月20日です。論文、随筆は2,000字程度、短信、個人消息は500字程度です。どうぞ皆様、奮ってご寄稿ください。また、ハーディに関する著書、翻訳等につきましては編集者までご連絡ください。お待ちしております。

